

乳がん看護認定看護師の活動

内海 真紀

日本医科大学付属病院中央棟 6 階第 2 病棟

Maki Utsumi

Department of Nursing Service, Nippon Medical School Hospital

(日本医科大学医学会雑誌 2015; 11: 201)

乳がんは女性の臓器別がん罹患率 1 位であり、死亡率も増加している。好発年齢は 45 歳前後であり、家庭や社会で様々な役割を担う女性の罹患率が高いといえる。そのため、集学的に行われる治療と患者の生活を支えるための支援が求められている。乳がん看護認定看護師はこうした背景の中 2006 年に誕生した。当時私は病棟で勤務しており、乳がん患者が抱える問題についてあまり深く理解できていなかった。乳がん看護認定看護師として外来に出向き実際に外来での患者と関わってみると、患者は治療と生活を両立させるために様々な悩みを抱えていることがわかった。家庭や社会で様々な役割を果たす女性にとって、手術での乳房喪失や化学療法での脱毛は生活の大きな妨げとなる。しかし患者は「治療で命が助かったのだから」と乳房喪失や脱毛をあきらめのような気持ちで受け入れ、中には社会復帰に自信が持てずに仕事を辞めてしまった患者もいた。患者の生活を支えるため、悩みを相談できる場を提供したいという思いから、現在では乳がん看護相談という看護外来を行っている。看護外来では治療に伴う不安や副作用の対処について、リンパ浮腫など様々な相談がある。患者の声を十分傾聴し、生活に合わせて具体的にどのように対処していくかをともに考えている。また患者が同病者と情報交換

をする場を提供するために、患者会を企画・実施している。患者会は同病者だからわかりあえる思いを共有し治療に対して前向きになることにつながっているように思う。今後もこのような場を提供できるようにしていきたいと考えている。病棟では退院後の生活を見据えた看護を実践することを目指している。自分自身が役割モデルとなれるよう実践し、病棟看護師が乳がん看護に悩んでいる時は一緒にケアを行うよう努めている。例えば乳房喪失に伴うボディイメージの変容に対するケアの一環として補整パットや下着の指導などを病棟看護師とともにやっている。さらにがん看護専門看護師や、ほかのがん領域の認定看護師とともにがん看護教育にも携わっている。今後も引き続き患者によりよい看護が提供できるよう、がん看護教育を続けていきたいと思っている。

私は活動を理解してくださる看護部や病棟スタッフ、乳腺科医師など多くの人に支えられてきた。私自身は乳がん看護認定看護師としてこれからも患者が治療と生活を両立させてその人らしく生きることを支えていきたい。

(受付：2015 年 5 月 26 日)

(受理：2015 年 8 月 13 日)